

# 本学教員出版物の紹介

愛知大学出版助成図書



## 『エネルギー社会経済論の視点』 大澤 正治（経済学部教授）

はからずも、出版助成をいただく幸運に恵まれた。何気なく使っているエネルギーに関して、色々と視点を変えて考えてみた。

そもそも、エネルギーとは何か。エネルギーは姿も形も見えないが、何かを介してはつきりとわかる。そして、エネルギーがなければ生活できないという。

学生に、日頃、使っているエネルギーは何かと聞くと、蛍光灯という答えが返ってくる。すると、私は、蛍光灯を介して、エネルギーのしごとの恩恵を受けている、と説明する。私たちは、電力会社に電気料金も支払うが、蛍光灯も買わなければ、エネルギーの恩恵を授からない。このように考えると、エネルギーのために私たちが支払うのは光熱費だけではない当たり前のことが理解できるはずである。

話しを変えて、学生に暖房方法の選択を迫るのも愉快である。電気ストーブとガスストーブの比較もけっこう難しい。ある時、賢明な学生がいた。彼は、暖房が不必要となる夏、ストーブが役立つかを考えるという。その点では、電気炬燵が良いという。テーブルとして通年、使える。ストーブでは保管コストがかかると彼は指摘する。

このような話しは、経済学としてオーソドックスに考えることができる易しい応用であるが、どうも、世の中で考えているエネルギーの視野からは排除されている。

だれもが同意する現代的なエネルギーの常識は、化石エネルギーに代替するエネルギーをだれもが待ち望んでいるということである。確かに正しい考え方であるが、問題は、世界のエネルギー消費の9割も占める化石エネルギーからどのように撤退するかである。経済学としては、そのコストを考える。スクラップは、ビルドよりも大変なことである。スクラップしないでビルドするともっと大変なことになる。

色々と言っておきたいこと、世の中に聞いてみたいことが多かったが、出版してから思い出したこと、思いついたこともたくさんある。さあ、次の機会のためにエネルギーのストックを始めよう。次回の題はもう決めている。『エネルギー社会経済論の失点』である。（著者）

エネルギーフォーラム 2005年3月 237頁 定価（本体1800円＋税）。



## 『アルベルトゥス・マグヌス 鉱物論』 沓掛 俊夫（経済学部教授）

西欧ラテン世界において、盛期スコラ学の時代といわれる13世紀に、自然学の広範な分野についてアリストテレスのラテン語訳された著作の註釈やそれに基づく著述を行ったドミニコ会士のアルベルトゥス・マグヌス（Albertus Magnus; 1193?-1280）がいる。彼はトマス・アクィナスの師でもあり、アリストテレス主義スコラ哲学の創始者でもあるが、鉱物界にも関心が深く、『鉱物論 *Mineralium*』全5巻を著した。今回翻訳したラテ

ン語の原典は、Borgnetの編集したアルベルトゥス・マグヌスの全集 (*Opera omnia*, 38 vols., Paris, 1890-1899) の中の第V巻に収められたものである。

アルベルトゥスは鉱物界を石・金属・中間物の3つに分類している。それらの産地、産状やさまざまな性質を記載し、その成因や護符や医薬としての効能などを論じている。石については、古代ギリシア以来の四元素(火、気、水、土)説で、質料(構成物質)や性質を説明しているが、金属についてはアラビア錬金術の硫黄-水銀説に基づいてそれらを解釈している。全部で約150種の鉱物(岩石・鉱物・鉱石・金属など)が記載されている。したがって、この書物は、古典古代(ギリシア・ローマ)時代とアラビアの鉱物に関する知識を集大成したものとも言えるが、アルベルトゥスが鉱山で観察したことや自身で行った錬金術の実験の結果をも加味して書かれているので、鉱物界について彼が独自に築き上げた体系でもある。

近代語とは違って、古典語の文献を翻訳することは相当の困難が伴うが、特に自然科学の分野の文献では、現在と当時とでは概念や用語が大きく異っており、適当な訳語を選ぶ(または造る)のに苦労した。ラテン語はカエサル(シーザー)の「来た、見た、勝った」ではないが、極めて簡潔に書かれているために、字面だけを訳してもほとんど意味が通じず、その背景をも汲み取って訳さなければならない。そのため、関連した事項についての幅広い知識が必要とされる。さらに、アリストテレスの質料と形相、可能態と現実態の哲学に基づいて解釈されているので、その方面の知識も必要とされた。(著者)

朝倉書店「科学史ライブラリー」の一冊 2004年12月 vii+188頁 定価(本体3600円+税)。



『矛盾研究—「新文学」の批評・メディア空間—』  
桑島 由美子 (経済学部助教授)

「メディア」という言葉から今日イメージされるのはマス・カルチャー研究であったり表象文化論であったりするが、本稿は大衆文化・通俗文学とは対立概念である「新文学」(知識エリートの文学)と近代メディアとの連繋についての一試論であり、十年來の研究テーマである矛盾についての専著でもある。20世紀を代表するリアリズム作家・茅盾は90年代の文化批評において欧化・モダニティ・メディアなど様々な視点から議論される対象となって来ている。それは茅盾が、出版メディアとの関わり

から「新文学」制度化の象徴的存在であり、国民国家統一を背景にして進められた『中国新文学大系』編纂をはじめ、創作理論・作家論・メディア批評においても時代の先蹤と位置付けられるためである。茅盾の伝記資料や近代出版関係の資料が出揃った今日、五四期に文化価値の転換をもたらした、20年代から40年代において「公共圏」を半ば独占した「新文学」と近代メディアとの連携について考察がなされても良い時期ではないだろうか。

以下各章の内容について触れると、第一章では商務印書館編訳所の文化史的背景と文学研究会同人の文学論・初期の評論、第二章では国民革命期のメディア(『民国日報』を中心として)、第三章では30年代の文芸誌・文化期刊と初期小説・『子夜』における物語コミュニケーションの多次元性、第四章では抗日戦期文化界と出版メディア(「生活書店」を中心として)をテーマとして取り上げている。未公開資料や現地調査の成果も併せ、同時代の文学研究多元化を受けての「重写文学史」や經典作家の再評価を取り込みつつ、90年代における茅盾研究の総括と新しい視点を提示した。

拙著の刊行は平成16年度愛知大学学術出版助成を受けてなされたものであり、心から感謝を申し上げたい。(著者)

汲古書院 2005年2月 viii+328頁 定価(本体7500円+税)。